

# 巻頭言

2003 2月号

## 中国は頼もしき コー・リーダー である



小島

(世界経済研究協会理事  
一橋大学名誉教授)

清

中国経済の躍進は決して脅威ではない。ビジネス・チャンスだ。中国は東アジア経済圏の平和と繁栄を築く「頼もしきコー・リーダー」である。

十三億という世界最大の人口が脅威とチャンスの共通源泉である。一人当たり平均所得は米・日の二十分の一以下（およそ一〇〇〇ドル）と低いが、国民総生産（GDP）は数年にして米国を上回る（購買力平価GDPは既に日本以上になった）。一人当たりわずか一ドルでも十三億ドル（約一六二五億円）の需要が生まれる。それが年一〇%近くの率で急増するのである。隣国が富裕になる程、比較生産費に従う投資と貿易の拡大を通じて、自国もまた豊かになる。この共存共栄の利益こそ国際経済取引の原則である。

中国は一九七九年に改革開放路線に転じて以来、外国直接投資の導入を挺子として急速な雁行型キャッチアップ工業化を短期間に成功させつつある。WTOへも加盟できた（二〇〇一・一二）。加工農産物や労働集約的な繊維製品から始め、鉄鋼・化学、電気製品、さらにIT（情報技術）製品に及ぶいわば総花的工業化・輸出主導急成長を（一九六〇～七〇年代の日本と同様に）一挙に達成し、今や「世界の工場」に躍進した。

この圧縮された飛躍は、(1)順を追った産業・貿易構造高度化を予定するいわゆる「雁行型経済発展モデル」とは異なる。(2)IT関連産業の一部では「カエル跳び」を果し日本を上回るようになった。だがこれら批判は雁行型発展論の変質をせまるわけではない。むしろ発展の国際的伝播が成功し、日・中経済（さらに東アジア経済）が同質化してきたこと、従って同質化の矛盾・困難を打開し東アジア経済を活性化する方策を希求すべき段階に到達したことを意味する。その妙薬こそ産業内水平貿易（棲み分け分業）の推進に他ならない。

「脅威」は、中国が「世界の工場」に躍進したため、日本（ならびに台湾・韓国やアセアン諸国）が、低廉な中国製品の洪水に見まわれ、入超に苦しむ懸念があることだ。だがそうではない。対中貿易は輸出も輸入も急速に伸びている。高度成長を持続するのに、中国の輸入需要は、食料、エネルギー、鉄鋼、基礎化学品、さらに各種生活上用消費財など驚くほど膨大である。外資依存の総花的工業化には、技術、原材料、部品、機械設備の大量な輸入も不可欠だ。中間財輸入と製品輸出、廉価品輸出と高級品輸入という各種産業内水平貿易を拡大する余地はまことに大きい。日・中経済が貿易と直接投資の拡充を通じて、もはやお互に切り離しえない程に結合し一体化することによって（EUにおける独仏協調と同様に）、東アジア地域の平和と繁栄が構築される。ビジネス・チャンスは、モノの生産活動だけでなく、金融、流通、情報通信、教育、観光など尽きるところがない。中国は頼もしきコー・リーダーである。